

中国における中学生の登校理由の検討 : ポジティブ心理学の視点から

著者	王 巖?
発行年	2019
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102甲第9242号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00158142

氏名	王 巖崧
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	博甲第 9242 号
学位授与年月	令和元年5月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	中国における中学生の登校理由の検討 ——ポジティブ心理学の視点から——

主査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄司 一子
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	濱口 佳和
副査	筑波大学准教授		飯田 浩之
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	飯田 順子

論文の内容の要旨

王 巖崧氏の博士學位論文は、中国の中学生が高い学業ストレスに晒されているにもかかわらず、不登校になることなく学校に通い続けるのはなぜか、という問いを立て、中国における不登校研究を進めるため、中国の中学生の登校意識を詳細に検討し、ポジティブ心理学の視点から、これを検討し、登校に関連する要因と学校適応との関連を実証的に検討した論文である。その要旨は以下のとおりである。

著者の博士論文は3部構成となっている。まず第1部で不登校に関する理論的検討を行い、第2部では尺度作成と関連要因の検討、第3部では第1部と2部をまとめ全体的考察を行っている。

第1部は1章から5章で構成され、先行研究の検討が行われた。日本では、いじめ、学校ストレスなどとの関係で不登校が増え続けている一方、中国では、親の期待を背負い、児童生徒の学業ストレスが非常に高いにもかかわらず不登校生徒はいない現状が認められる。中国では学業ストレスが非常に高いことを考えれば今後不登校生徒が出る可能性があるが、現状では不登校生徒がいらないのはなぜか、中国の児童生徒のメンタルヘルスはどうかについて検討する必要がある、と述べている。

第1章で不登校に関する先行研究の検討、第2章で登校理由に関する先行研究、第3章で中国における学校現場の現状と社会文化的状況、第4章でポジティブ心理学でとりあげられている感謝に焦点をあて理論的展望が行われた。第1部の理論的検討から、具体的に以下の問題点が示された。

1. 日本では、不登校の生徒が再登校することの困難さが明らかにされ不登校の後の支援に関する研究は多く、予防的な視点からの研究は少ないこと。
2. 予防的な観点から登校理由の重要性が指摘されているが、中国において登校理由を実証的に扱った論文はほとんど無いこと。
3. 日本では登校理由の実証的研究も散見されるが、登校理由の構成概念は研究者により異なること。先行研究では日本版「登校理由尺度」で中国都市部の中学生の調査が行われているが、中国独自の調査が行われていないこと。
4. 中国では、重要な他者への感謝の重要性が指摘されているが、実証的に扱った論文は限られていること。感謝に関する研究ではその定義や構成概念も研究により異なり、感謝に関して今後より実証的な

研究が必要であること。5. 感謝とメンタルヘルスに関する研究は欧米で多いが、アジアでの研究がさらに必要であること。感謝は文化的枠組みと深く関連しており、中国の中学生の感謝とメンタルヘルスとの関連について検討する余地があること。以上が本研究の目的とされた。

第2部では、以上の目的を明らかにするため4つの研究が行われ、実証的検討が行われた。

【調査対象】(1) 尺度作成するための予備調査(自由記述的質問紙調査): 中国の都市部中学校A校に通う中学生1・2・3年生計105名(男性49名, 女性56名)および地方の公立中学校B校に通う中学生1・2・3年生計125名(男性57名, 女性64名, 不明4名), 計230名が調査対象であった。(2) 質問紙調査: 中国の地方の吉林省の公立中学校に通う中学1年生~3年生235名($M_{age}=13.8$; $SD=1.01$; 46%男子 [$n=108$], 49%女子 [$n=114$], 5%不明 [$n=13$]), と都市部の上海市, 江蘇省と浙江省の3つの中学校に通う中学1年生~3年生853名($M_{age}=13.9$; $SD=1.12$; 51%男子 [$n=440$], 46%女子 [$n=389$], 3%不明 [$n=25$])であった。このうち84名を対象に4週間の間隔をおいて再検査が実施された。

以上の対象者に対して4つの研究が進められた。

まず, 第7章【研究1】では, 中国版中学生用登校理由尺度の作成が行われた。中国版中学生用登校理由尺度の構造を明らかにするため, 中学生用登校理由尺度を作成し, その信頼性と妥当性を検討した。その結果, 「外的圧力」「規範・義務」「学校魅力」「習慣」の4因子が得られ, その信頼性と妥当性が確認された。第8章の【研究2】では中学生用重要な他者への感謝尺度の作成が行われその信頼性と妥当性が検討された。その結果, 「学業を通じた返報動機」と「感謝感情」の2因子が得られ, その信頼性と妥当性が確認された。【研究3】では登校回避感情を抱く中学生の登校理由の規定要因を検討するため, 重要な他者への感謝, 教師への信頼感との関連が検討された。中国の2つ中学校の中学生560名を対象に質問紙調査を行った。その結果, 中学生の登校理由は, 重要な他者への感謝と教師への信頼感に影響されることが明らかになった。第9章【研究4】では登校回避感情を抱く中学生の登校理由とメンタルヘルスに関する検討を行うため, 登校理由と学校適応感, 疲労感との関連をした。中国の2つ中学校の中学生560名を対象に質問紙調査が行われた。ここでは中学生の登校理由が学校適応感や疲労感に影響を与えていることが明らかにされた。特に, 登校回避感情を持っている生徒の「学校魅力」が高いほど, 学校適応感の被信頼・受容感と学校生活充実感も高くなることが示された。また「学校魅力」が高いほど, 疲労感の気力低下, 意欲・体調が低くなることも明らかにされた。このことから, 中学生期のメンタルヘルスを維持するため, 学校魅力が重要であることが示唆された。

第3部では結論が述べられた。本研究の結果から, 中国の中学生における登校理由の構成概念が実証的に明らかになった。また中国の中学生における重要な他者への「感謝」の構成概念が実証的に明らかされ, 登校理由における感謝の役割が検討された。さらに, 「感謝」と「教師への信頼感」が登校理由に影響を与えることが明らかになった。また, 研究4では, 登校理由が生徒のメンタルヘルスにどのように影響を与えているかが明らかにされ, 学校魅力の重要性が明らかにされた。

本研究により, 中国版中学生用登校理由尺度が作成されその妥当性および信頼性が明らかにされた。この尺度開発によって, 今後中国独自の生徒の登校理由に関する検討が可能となった。登校理由と感謝に関する実証的研究を進められ, 中国独自の生徒の感謝感情と登校との関連が明らかにされて, 登校・不登校に関する新たな知見が得られることが示された。

審査の結果の要旨

(批評)

中国では, 親や教師は教育に極めて熱心で, 受験が激化し, 児童生徒の学業ストレスは極めて高いが不登校生徒はいない。一方, 日本では不登校の児童生徒数は増加し続け, 問題の改善・予防が叫ばれている。著者は, 高いストレスにもかかわらず登校を続ける中国の中学生の登校の背景要因, 関連要因, メンタルヘルスを検討し, 実証した。本研究は, 中国の中学生が高いストレスに晒されているにもかかわらず登校する背景要因を, 特にポジティブ心理学の視点から明らかにし, さらにメンタルヘルスとの関連を検討して不登校予防に役立てようとした点が高く評価される。

平成31年3月22日, 学位論文審査委員会において, 審査委員全員出席のもと論文について説明を求め, 関連事項について質疑応答を行い, 最終試験を行った。その結果, 審査委員全員が合格と判定した。

よって, 著者は博士(教育学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。